

東アフリカサバンナ地域における 中・後期石器時代の適応

Middle and Later Stone Age Adaptation in East
African Savannas

木村有紀

はじめに

- ① アフリカにおける中(MSA)・後期石器時代(LSA)
- ② 分析資料
- ③ MSA・LSAの東アフリカサバンナ地帯の環境
- ④ MSA・LSAの石器組成の変化
- ⑤ MSA・LSAの石材の変化
- ⑥ 南アフリカにおけるMSAとLSAの特徴
- ⑦ アフリカのMSA・LSAにおける適応

【論文要旨】

本論は考古資料報告書に基づいて東アフリカの中期石器時代(MSA: 20-3万年前)と後期石器時代(LSA: 3-1万年前)の狩猟採集民の適応を比較検討する。分析の対象としたのは主にケニア南部とタンザニア北部の遺跡であるが、比較資料として南アフリカの2遺跡を加えた。

獣骨資料から古環境を復元した結果、ある遺跡では寒冷、乾燥化による草原の拡大が推測されるが、別の遺跡では現在とほぼ同様の環境が認められた。低緯度に位置する当該地域では北半球中緯度以北のような極端な寒冷化は起こらず、環境の変化は地域ごとに異なっていた。

石器資料の分析では、MSAとLSAの共通点と相違点が共に認められた。MSAでは尖頭器と求心剥離型石核が、LSAではバックドピース、打面固定型石核と両極型石核が特徴である。また、MSAからLSAにかけて一貫して在地石材の使用が続けられ、LSAになるに従って質の悪い在地石材の使用がやや増加する。

東アフリカにおける一貫した在地石材の使用は、遠隔地石材の使用が増加する南アフリカのLSAとは対照的であり、両地域の適応の違いを示している。南アフリカのMSAはウッドランド植生に適応した文化であるが、最終氷河期の寒冷乾燥化にともない、サバンナの群集性大型草食獣狩猟に適応したLSAに移行する。南アフリカのLSAは遠隔地石材を多用し、高い移動性、広い遊動域、低い人口密度、大きな集団サイズに特徴付けられる。一方、東アフリカのMSAとLSAは共に南アフリカのLSAと同様、サバンナの群集性大型草食獣狩猟に適応した文化であるが、在地石材を多用し、単純な社会ネットワークを持ち、一定の遊動域を季節的変動の激しい資源に対応して離合集散を繰り返しながら移動していた可能性がある。